

第I章

海・港と共に歩んだ尾道

●中世 開港みなと尾道～大田荘の倉敷地として

港町尾道は、平安時代末期の1169年(嘉応元年)に後白河院領大田荘(世羅町)の年貢米を運ぶための公認の積出港となったのを契機として、港湾都市としての発展の歴史をたどることとなりました。

大田荘は、後に後白河院から和歌山の高野山の手に移りましたが、尾道へ運び込まれる年貢米は、年間1,840石あまり(4,600俵ほど)でした。年貢は輸送の際に中継地として一時保管する場所である尾道倉敷に集められ、出航により気候を見計らって海路紀州へと積み出されました。船は紀伊湊(和歌山市)に着岸し、そこには高野山の総倉敷、政所が設置されていました。

海上輸送は専門の海運業者が担いました。彼らは元々荘園領主や荘官のもとで、輸送管理の任に当たっていましたが、港の発展によってある者は海運業者として、またある者は貨物の仲買人として、次第に港の商人へと独立し、その中には大きな富を蓄える者も出てきました。そしてここに商港都としての基盤が整い始め、みなと尾道の始まりとなったのです。

寺院の建立が始まったのもこの時代以降です。これらの寺院を含む中世の街並みは尾道遺跡として、現在の本通りを中心とする旧市街地一帯の地下に埋まっています。



時宗本堂としては最古の西郷寺本堂(重要文化財)

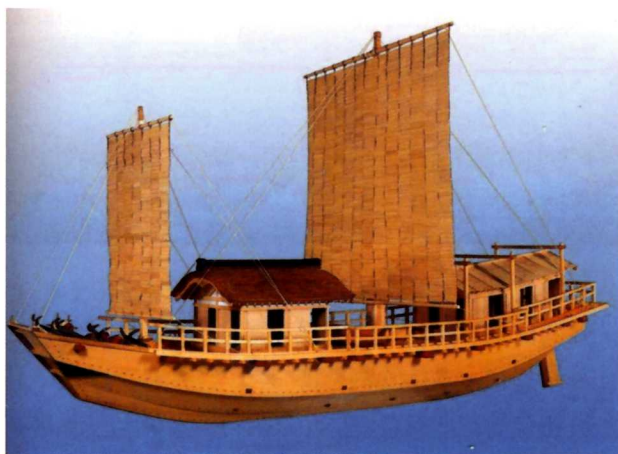
●中世 遣明船と尾道港

室町時代の1404年(応永11年)～1547年(天文16年)の約150年間、日本と中国の明との間で19回にわたって行われた勘合貿易で活躍した木造帆船の遣

明船は尾道にも寄港しています。

交易では日本から刀剣や硫黄、銅などの鉱物、漆器や屏風などの工芸品が輸出され、明からは生糸、絹織物、明銭(永楽通宝)などが輸入されました。

このころ山陽地方を統括した守護大名の山名宗全は、尾道の大本寺である西國寺を庇護していました。遣明船の船団の船主は社寺等で、その中には現尾道市域に船籍を有するものが見られます。山名氏はこれら船団に深く関わっていました。



遣明船模型
(広島県立歴史博物館蔵、写真提供：広島県立歴史博物館)

●中世 海に生き海に闘った海人～村上水軍

村上水軍は愛媛の能島(今治市宮窪町)、来島(今治市波方町)、そして因島の三島の村上氏によって構成される瀬戸内の海の武人でした。彼らは海賊というイメージで語られることもありますが、一方で瀬戸内海を往来する船を守り、航路を先導する水先案内人で、船の安全な往来を保障する代価として、警固料と呼ばれる通行税を徴収していました。

因島村上氏は、少なくとも15世紀中頃には活動を始めており、因島も徐々に村上氏の支配下となりました。

2代村上吉資は、伊予の河野氏に忠誠を示す一方で、本州側にあっては備後守護の山名氏とも通じて遣明船の警備も担い、恩賞として土地を与えられました。

6代村上吉充の時代が因島村上氏の全盛期でした。吉充は小早川氏や毛利氏と結び、1555年(天文24年)の厳島合戦では、村上水軍が抜きんでた功績を挙げ、陶晴賢の水軍を圧倒しています。

この戦功により、吉充は小早川隆景から新蔵人の官職に推挙されるとともに、向島を所領として支配することを許され、向島の南東部、立花の観音崎に余崎城を築き、因島重井町の青木城に移るまで、ここを本拠としました。

